



作業療法士
×
元ニットデザイナー

STORY_2

動きはじめた手で、編む人生を再び。

有川真美

公立黒川病院 作業療法士

東北文化学園大学 リハビリテーション学科作業療法学専攻2010年卒 (山形県立山形中央高等学校出身)

手 芸や料理などの訓練を通して、障害のある人がスムーズに日常生活を送れるようサポートする有川真美。身体と心のリハビリの専門家である彼女が、脳の病気で左半身がマヒした恵さん(仮名)63歳と出会ったのは、病気になってひと月後だった。「1カ月ベッドに寝たままで、時間がたてば治ると思っていたマヒも残り、精神的に起き上がる気力さえなくしていたんです」。ニットデザイナーだった恵さんは、定年後も趣味でカーディガンなどを編み、夫によくプレゼントしていたという。その左手は動かず、編み棒を握ることさえできなくなっていた。「最初は、顔を覚えてもらうことから始まります。朝と午後に声がけをして、慣れたら散歩してやりとり。リハビリより前に、信頼を築けるように」。安心感を得てからリハビリに入るのは大切なポイント。やりとりを重ねるなか、恵さんから「編みものがしたい」と聞いた。「体の状態はもちろん、本人や家族の思いも考えてリハビリプログラムを組み立てます。指曲げ運動、肩やひじの運動、編みものの練習も加えた毎日1時間のリハビリ。簡単な指編みからはじめ、次はかぎ針に、と」。ところが、恵さんはかぎ針を動かせなかった。「もう編めないのかなあ」って沈んだこともあり。そんなとき励まして、よけいに落ち込むだけ。まず話を受け入れるんです。そして「指編みまではできるから、かぎ針を太くしてみましょうか」と語りかける。できること、できないことを見極め、道具などを工夫し、プログラムを柔軟に変えていく。恵さんは自分から編み続けるようになった。「そうしたら30cm四方の模様編みができあがったんです。医療スタッフやほかの患者さんから『スゴいね』と言われたのも自信になったみたいで」。恵さんはアクリルたわしを編んでスタッフやほかの患者にプレゼントし、喜ばれる存在になった。退院した恵さんは、いまどうしているのだろう。「ときどき話しに来てくれます。こんなの編んだよとか、旅行に行ったよとか。リハビリ大変だったけど、がんばってよかったと笑顔で」。



身体の状態はもちろん、本人の思いを大切に



できることが増えていくと、心までポジティブに